近代文学研究叢書

第六十七巻

昭和女子大学

近代文化研究所

近代文学研究叢書

第六十七巻

平成5年7月20日　初版印刷発行

定価5,700円（本体5,534円）

著者　昭和女子大学近代文学研究室

発行者　外山滋比古

印刷所　大文堂印刷株式会社

発行所　昭和女子大学近代文化研究所
東京都世田谷区太子堂一―七
電話03（三四一一）五一二九番
振替口座東京四―一七〇八六七

ISBN 4-7862-0067-0　C3091　P5700E

目次

口　絵……一
『近代文学研究叢書』の成立……二
凡　例……五
森田草平……七
野上臼川……一三五
草村北星……二三五
白柳秀湖……二七五
PROFILES……四〇八
巻末付記……四一四
第六十六巻年表補遺……四一六
索　引……四四一

『近代文学研究叢書』の成立

『近代文学研究叢書』は昭和三十一年一月、昭和女子大学光葉会からその第一巻が発行された。以来、明治期全十二冊、大正期全十三冊、昭和期が本巻を加えて四十二冊を刊行、続刊中である。

本叢書は、創立者人見圓吉（東明）が建学の精神に基づき優れた研究者の養成を目的とし、これによって文学日本の近代相がいささかでも究明出来ればという強い願望により創められたもので、本学学生による近世の国文学者、洋学者についての研究調査をまとめた『文学遺跡巡礼』（昭和十三年十月、第一輯発行）が母胎となっている。

昭和二十年、戦争も末期に近づいた四月の大空襲により、本学は校舎とともに蔵書と未発表原稿の一切を焼失した。青年時代、三木露風、野口雨情らとともに早稲田詩社をおこして活躍したかつての詩人東明は、この時から明治の詩書をはじめ近代文学関係の文学書の蒐集にとりかかり、現在の近代文庫の基礎が固められた。神田の古書展では「文学書の値をつり上げる」という評判が立つほどの蒐集ぶりで、こうして蒐められた典籍をもとに近代の文学者、思想家約八百名の伝記、業績に関する資料文献の尨大なカードの作成には日本文学科の学生が総動員され、『近代文学研究叢書』の基礎的資料の基盤が築かれたのである。なお、母胎となった『文学遺跡巡礼』はその名の示す通り、生涯と業績に加えて遺跡の実地踏査、遺族の訪問記を特色としたが、本叢

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

書はこの特色をそのまま踏襲している。すなわち、文学者の遺族を訪ね墓所や遺跡を踏査することによって、業績を含めたその全体像を闡明しようとするものである。また、著作と資料に関する年表調査も平行的になされ、網羅的な資料蒐集に意を注いでいる。業績については各専門分野における学界の権威に指導を仰ぎ、特に、発足当時の基礎固めには月曜会（学内における近代文学の研究）での研鑽が大きな支えとなった。

第一巻では明治三年二月歿のB・J・ベッテルハイム、八田知紀、S・R・ブラウン、J・R・ブラック、成島柳北、森有礼、新島襄、佐佐木弘綱、中村正直ら九名が収められ、以後歿年順に収録された文学者、思想家はこれまでに三百余名を数え、本巻を以て通巻六十七冊に及んでいる。その間、第六巻発刊の昭和三十三年に本叢書は菊池寛賞を受賞している。

なお、創刊当初から監修者として叢書の全般にわたりご指導、ご助言をいただいた方ですでに物故された諸先生を左に記して感謝の意を表したい。

秋庭　太郎（演劇学）　池田　亀鑑（国文学）　石田　吉貞（国文学）
石森　延男（児童文学）　上井　磯吉（英文学）　太田　三郎（比較文学）
荻原井泉水（俳文学）　片桐　顕智（和歌文学）　金子　健二（英文学）
金子　武雄（国文学）　河鰭　実英（歴史学）　木俣　修（和歌文学）
木村　毅（比較文学）　斎藤　一寛（仏文学）　坂本由五郎（英文学）

佐々木八郎（国文学）　笹沢　美明（独文学）　佐藤　幹二（国文学）
山宮　允（英文学）　島田　謹二（比較文学）　玉井　幸助（国文学）
辻村　鑑（英文学）　内藤　濯（仏文学）　成瀬　正勝（近代文学）
能勢　頼賢（国語学）　浜　徳太郎（美　学）　人見　圓吉（近代文学）
本間　久雄（近代文学）　宮内　秀雄（英語学）　矢野　峰人（英文学）
吉田　澄夫（国語学）

本巻には、小説家・英文学者森田草平（明治十四年三月十九日～昭和二十四年十二月十四日）、小説家・英文学者・能楽研究家野上臼川（明治十六年九月十四日～昭和二十五年二月二十三日）、小説家・出版事業家草村北星（明治十二年三月十日～昭和二十五年五月二十五日）、小説家・評論家白柳秀湖（明治十七年一月七日～昭和二十五年十一月九日）の四名の研究調査を収めた。

凡例

一　著作年表は、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを収め、資料年表は、第三者の考説、評論、感想等の文献を収めた。単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名と発行所を誌紙名欄に、小題の執筆者を筆者欄に掲げ筆名、筆者名は掲載誌紙の表記にしたがった。

二　年表記載で、調査者が直接あたれなかった項目については☆印を付した。

三　各稿の末尾に「採訪」と「参考文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表し、また、資料の出所、起稿や修訂にあたって参考にした文献の依拠を明らかにするためのもので、「参考文献」は資料年表と一部重複することがある。

四　表記はすべて現代仮名遣い、常用漢字を用いた。但し、人名は、各研究対象者に限り旧漢字で表記した。

五　引用文の表記は仮名遣いは原文にしたがい漢字は常用漢字を用いた。外国文の場合は訳文または大意を添付する。なお原文中の誤りや疑わしい箇所の右側に（ママ）と記した。

六　年代は日本年号と西暦とで適宜表記し、どちらからでも検索できるようにした。年齢は満年齢を用いた。

森田草平

明治十四年（一八八一）三月十九日生
昭和二十四年（一九四九）十二月十四日歿

一　生　涯

イ　出生と幼少青年期

森田草平は、明治十四年（一八八一）三月十九日（戸籍謄本には二十一日と記載）、岐阜県方縣郡鷺山村七拾番戸（現、岐阜市鷺山）に、父亀松、母とくの長男として出生。米松と命名された。生家は「草分名主と言はれるやうな大庄屋」でも「世襲」でもなかったが「村の庄屋」であり、父亀松は菩提寺の門を寄進する程の名望家であった。鷺山村は長良川の支流古河の北西に臨み「岐阜とは長良川を距て、土岐氏最後の主土岐頼芸が別墅を設け、後には斎藤道三が城づいて居つた小山の麓」（「漱石先生と私　上」昭22・12）に位置する。この高さ三十メートル余の禿山は道三の伝説を秘めて幼い頃の米松の、郷里のシンボルマークでもあった。この道三の滅びた後、その落ち武者が村に土着した者があったと言われるが、森田の家はそうではなく先祖よりの土百姓であったらしい。明治十八年、四歳で隣村土居村の小学校に入学したが、特別出来の良い子供であったとはいえむやみに画の多い漢字の読本には辟易し、間もなく退学、翌々二十年、六歳になって改めて同じ小学校に入学した。小学校時代は悪戯っ児で勉強も怠りがちであったが、成績は良い方であった。四年の課程を終え明治二十四年三月、岐阜市高等小学校（現、金華小学校）に入学した。この年五月、父亀松が死去したため、長男である彼はわずか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十歳にして家督を継いだ。さらに十月二十七日、濃尾の大震災で岐阜市が全焼した。この時小学校も炎上、彼等一家は難を逃れたものの、村内には死屍累々、余震は半年にも及ぶ大きな災害を被った。こうした恐怖の体験を嘗めて「初めて浮世の有為転変を悟」（「自筆年譜」現代日本文学全集42 昭5・6）ったのである。後、「地震」（明星 明36・4）に作品化されている。

明治二十七、八年にわたった日清戦争は戦勝をもって終結したが「日清戦争の影響と感化とを受けたるらし」（自筆年譜）とあるように、岐阜の片田舎にも戦勝ムードが溢れて、彼を軍人志望に駆り立てたことと、費用が少なくて仕官の道を求めようと、明治二十八年四月、岐阜市高等小学校を卒業すると同時に単身上京し、芝区新銭座攻玉社海軍予備校に入学した。下宿先は、築地の裏の金物商、同郷出身の平野栄助（四代目沢村源之助の父）の家である。栄助老人は親切に世話をしてくれたが、都馴れするにつれ窮屈になり、三月半ほどで他に下宿を探して、口実をもうけ、老人の家を出てしまった。もともと海軍々人志望が、極めてロマンチックな考えで「水雷にでもあってぶかぶか死んでしまうのが一番いいという気持」（「往時茫々」日本評論 昭24・12）からで、実際は小説ばかり読み耽り、為に目を害し海軍予備校を退学した。そのころ主として「文芸倶楽部」（明28・1創刊）を愛読した。また、広津柳浪の「黒蜥蜴」「今戸心中」「河内屋」、泉鏡花の「夜行巡査」「外科室」、川上眉山の「うらおもて」、樋口一葉の「にごり江」「十三夜」等の小説に親しんだ。

こうして「所々の学校を放浪」（自筆年譜）した挙句、明治三十一年三月、中学校卒業資格を得る為に、杉浦重剛の日本中学校五年級に編入学した。学校を転々とし、人にもなじめず孤独な毎日を送ったが、朝日新聞記者

で保証人であった加藤眠柳を介して万朝報の堺枯川を知った。このころ「エノック・アーデン」に始まりテニソン、スコットなど注釈本のシリーズ三十冊ぐらいを濫読した。翌三十二年三月同校を卒業すると一旦帰省し、金沢の第四高等学校を受験し一番で入学した。しかしそれもつかの間、十一月に、郷里の親戚の娘が彼の許に出奔してきてそのまま同棲したことが発覚し、当時の担任藤井乙男教授に諭旨退学を命じられた。彼はやむなく翌年の春まで名古屋を放浪し、その間森鷗外の『水沫集』を耽読、深く感動し純文学に興味を持つ端緒となった。

ロ　文学修行時代

明治三十三年五月、再度上京して根津権現境内にある下宿に落ち着いた。ここで彼は文庫派詩人河井酔茗と相識った。草平がいわゆる文壇人の知遇を得た最初の人である。七月第一高等学校を受験し合格したが、折からアフリカに所謂南阿戦争が勃発し彼はボーア人に加担して大統領の下にその独立戦争に参加したいと念願し、容易に入学の手続きを取らなかった。しかし、酔茗らの諫止にあい漸く九月、入学手続きを終えた。彼は学費を補うために渋沢栄一家の家庭教師として月給二十円を貰った。寄宿舎生活一年を終えて二年に進級したころ、同級生の生田長江（当時は星郊）、栗原古城、川下江村らと共に同人回覧雑誌「夕づつ」を作り「そろそろ文学的生活に入る下準備を始めた」（「自叙小伝」明治大正文学全集29　昭2・11）。明治三十五年、与謝野寛、晶子を新詩社に訪ねて知遇を受ける。間もなく雑誌「明星」にも寄稿するようになり、回覧雑誌「夕づつ」の誌名も鉄

幹から「花雲珠」の名を貰い、改名した。このころ「ドーデエの『サッフォー』、モウパッサンの「短編集」、ワシントン・アーヴィングの『アルハムブラ』」（自筆年譜）など盛んに外国文学を読み始め、三十六年には「サッフォー」に影響されて「仮寝姿」を書き、これは「文芸倶楽部」に投書して一等に入選し賞金二十円を得た。この年七月、第一高等学校文科を卒業、翌八月には長男亮一が生まれ学生の身分で父親となったのである。九月、東京帝国大学文科大学英文学科に入学、この冬彼は本郷区丸山福山町四番地に小屋を借りて移転したが、偶然にもそこが樋口一葉の旧居であったことを知り「正直に云つて、私は自分の将来まで約束されたやうな気がして、有頂天になつた」（「続夏目漱石」昭18・11）というほどに感慨を深くした。そしてこの一葉旧宅が縁で馬場孤蝶の知遇を得ることが出来、ツルゲーネフを紹介され、さらに「メレジュコーフスキの『人及び芸術家としてのトルストイ並びにドストイエフスキ』を」教示されたことから彼のロシア文学への傾倒はその極に達した。また、上田敏に引き合わされたのも馬場孤蝶を介してであった。

明治三十七年、上田敏は馬場孤蝶とともに雑誌「芸苑」を創刊したが、草平は生田長江らとともに同人として加えられる。また、敏に教えられて初めてダヌンツィオの「死の勝利」を読む。このころシェンケーヴィッチの「十字軍の騎士」を抄訳した。「時事新報」に連載の労をとったのは郷里の先輩加藤眠柳であった。彼の生涯の恩師夏目漱石に初めて謁したのが翌三十八年の十一月である。その後、本郷区駒込千駄木町五十七番地の漱石宅に毎週木曜日に参上、寺田虎彦、鈴木三重吉、小宮豊隆、野上豊一郎その他の漱石一門と面識を得た。彼はこうして漱石門下の一人として仲間入りするわけであるが、しかし彼には俳句の素養に欠けることで

異分子的存在を意識していたことと、そのころ最高潮に達していた日本の自然主義と彼の大陸文学を通じてみたそれとの、傾向のかなりの食い違いがあったことで、ある種の違和感を内心に秘めていた。しかし師漱石は「俳諧の低徊趣味にも感覚趣味にも終始するやうな人ではなかつた」（自叙小伝）その大きさに安んじて包まれた草平であった。なおこの年「捨てられたる女」（帝国文学　明38・6）を発表した。

八　活躍前期

明治三十九年七月、東京帝国大学文科大学英文学科を卒業した。卒業論文は「沙翁の前駆者クリストファー・マアロウ」であった。卒業したからには「一度は帰国して、郷里の母を省すべきだと思つたが、やはり就職のことが人並みに少しは気になつた」（「漱石先生と私　上」昭22・12）のでそのまま一月ほど東京に居残っていたが、やがて郷里鷲山に帰省すると、「母屋も離座敷も売つて、売れない古土蔵の中に独住ひをしてゐた」（同）気の毒な母のこと、以前子を産ませたことのある女（つねと亮一母子）のこと、そして下宿の娘さくのこと、など彼を待っていた問題は鬱々たるものばかりでなすすべもなく、真夏の日々を土蔵の二階に送っていた。こうした折も折、漱石の「草枕」（新小説）が発売になり早速それを貪り読んだ。打ちのめされるような感動に、文学への激しい欲求が、矢も盾もたまらず上京へと彼を駆り立てたのである。留守中の母の生活費に、売れ残った六、七反歩の畑地他を手放す手筈を整えて九月初めに岐阜駅を出立した。東京の下宿（丸山福山町）に落ち着いたが職もなく、翻訳などのアルバイトをしながら翌四十年四月から、漱石と松浦一の紹介で天台宗の宗教学校

に英語教師として着任、九月からは本郷弓町の京華中学にも奉職した。また六月、飯田町の成美女学校に閨秀文学会が開設（明星　誌上広告　明40・6～9）されたが、彼は生田長江、与謝野晶子らとともに講師の一人となった。その聴講生の中に平塚明子（雷鳥）や青山（山川）菊栄、岡崎千枝子らがいた。この時の明子との出会いが、後の「煤煙」事件の発端となる。夏、郷里から生まれて間もない長女を連れてつねが上京、彼はこの時も優柔不断に対処するしかない心弱さで、次第に色街の酒に浸るようになる。十二月のある日、学期試験の当日を失念して出校しなかったために天台宗中学林教師を免職になる。

明治四十一年三月二十一日、平塚明子との心中未遂事件をおこして大きな話題となった。二人は塩原尾花峠の雪山を、死場所を求めて彷徨していたところを発見されて連れ戻されたのであるが、二十五日の新聞はいずれも一斉にこの事件を大々的に取り上げた。まず「古来情死の沙汰珍らしからずと雖も、本件の如き最高等の教育を受けたる紳士淑女にして、彼の愚夫愚婦の痴に倣へるは、実に未曾有の事に属す」（東京朝日新聞　明41・3・25）と報じ、「森田文学士はとり押えの警官に対して『我輩の行動は恋の神聖を発揮する者にして、俯仰天地に愧づる所なし』と揚言せるに至つては沙汰の限ならずや」（同前）と記して草平の行動を全面的に否定、一片の同情も示さなかった。この事件により彼は、世間的信用失墜はもとより殆ど社会的に葬り去られようとさえした。当時このセンセーショナルな事件に対して論評が相次いだ。「女学世界」（明41・5）では「両人の行為に対する諸家の論評」の題下でまず内田魯庵は「彼等は芸術を直ちに人生に実現しようと試みた」、「これが抑大間違ひ」（悲劇？喜劇？）、また三宅雪嶺は「森田は文学的の新生涯に入るとか言つてゐるさうだがさすれば何れ

懺悔録のやうな物を書くであらう」（一種の色情狂か）、長谷川二葉亭は「社会が大いなる抑圧を以て個人を支配し駆使し桎梏して、殆ど個人を道具扱ひにし、個人を塵芥のやうに取扱ふといふ傾向に反撥して起るもの」（暗中模索の片影）と述べて時代精神の面影を、この事件に見ている。そして三輪田元道は「単に二人の問題に止まらず実に危険なる風潮である」「当事者には制裁を加ふべし」（二人の葬らるゝのみにはあらず）と、教育家らしくきびしい見解を示している。しかしこの草平を、誰よりも温かく迎えたのは師漱石であった。草平は漱石の家に二週間ほど世話になった半月後の四月十日、牛込筑土八幡前町二四の植木屋方に移り、三たび横寺町正定院本堂横手の六畳間に居を移したのが七月末であった。その間、この事件を題材にした長篇小説の作成に専心した。「煤煙」と題したこの小説は漱石の好意により「東京朝日新聞」紙上に掲載を許されたのであるが、「文壇生面の私としては、何の点から見ても固くならざるを得なかつた」（自叙小伝）。ために筆運びは遅々として進まなかったがともかくも翌四十二年一月一日から朝日新聞に連載が開始されたのであった。それは意外に評判がよく「旬日を出でざるに、予は所謂有名なる作家の一人とはな」（自筆年譜）ったものの生来遅筆の彼は焦慮と煩悶のうちに五月中旬、漸く一二七回を完結した。

明治四十二年十一月末から四十四年の末にかけて、朝日新聞紙上に漱石担当の「文芸欄」が初めて設けられ、草平はその助手として勤めるかたわら「煤煙」の続篇ともいうべき「自叙伝」を連載（明44・4・27～7・31）した。四十三年八月、修善寺で漱石が大吐血をした。漱石の病中、代わって彼が編集を担当したが続かず、結局翌四十四年十一月末に「文芸欄」は廃止された。その後大正四年までの数年間に「中央公論」、「新小説」他

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com